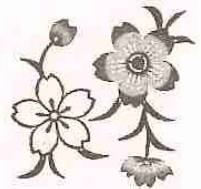


～沖縄研修に参加して～



11/4～7 と、那覇市で行われた小島代表が講師の「沖縄県地域密着型サービス外部評価調査員フォローアップ研修」に同行した。

調査員への講義の中で、グループホームえん 13 年の歴史をスライドで見ながらの「認知症グループホームの現状、目指すこと」では、介護保険スタート当時グループホームは、認知症ケアの切り札と謳われ「一緒にご飯を作って食べるのがグループホーム」、しかしその後は→「中重度対応」→「看取り対応」と変化してきた流れを振り返った。私自身も 13 年の歩みを大いに振り返る事が出来た。

開設の数ヶ月前、大工さんがまだ骨組み段階の中、グループホームえんを見学し入職。先輩ヘルパー方から研修を受け、「グループホームは終の住処として、在宅の延長線上」、介護は「熱いハート・冷めた頭・逞しい腕が大事」、「先手は打たないが、先を見越したケアが大事」、「あえて死角を作り、利用者の逃げ場を作っている」、「リスクも踏まえ、自由を尊重すること」など、右も左も解らない中教えてもらったことを、昨日のことの様に思い出した。

受講者の方から「その人らしい生活を支援するとは具体的にどう言うことですか!？」と質問されたのが胸に刺さった。認知症の進行や集団生活での制約の中、どうしてもその人の色が1色ずつ失われ、表情が画一的になり、個性を失いがちになる。日本社会を見渡しても「その人らしい生活」とは逆行し、多様性を排除し許容範囲が狭い社会に傾いている感がある。認知症や障害者が生きやすい社会は、皆が優しくなれ、生きやすい社会なのではないだろうか?現代がより効率や経済重視し、管理社会、右傾化となって息苦しくなろうとも、まず自分が社会や環境に変えられてはいけないと痛感した。

スライドの中で、ベランダで重度の認知症になった妻に夫がそっと寄り添い、静かに庭を眺めるなつかしい写真には、認知症になっても誰にも犯されない時間と空間があった。グループホームえんも、集団生活の中で、不自由は多々あると思うが「今日1日、楽しかったな～」と少しでも利用者方が感じられる支援があるホームにして行かねばと、改めて考えさせられた。

研修翌日、訪れた「ひめゆり資料館」では、敗戦濃厚な S20 年 3 月以降、ひめゆり学徒隊(15 才程の女生徒や教師)の 100 人以上が軍に見捨てられ、自決や戦死した事実を目の当たりにした。「旧海軍指令壕」では、集団で自決した手榴弾の跡が壁に残っていた。「沖縄戦は 4 人に 1 人が亡くなり、この世の地獄を1つにまとめた戦地」と言われる。多大な犠牲の上に、今の平和があることを痛感した。基地問題にしても、沖縄ばかりに負担を押しつけてはならないと再認識もした沖縄だった。

(グループホームえん／滝谷賢介)